

第18回  
新日鉄音楽賞  
受賞者  
インタビュー

# 幸せと明日へのエネルギーを 感じてもらえる演奏をしたい

ゲスト◎ピアニスト〈フレッシュアーティスト賞受賞〉

## 上原 彩子氏

プロフィール◎うへはら・あやこ

1980年、香川県生まれ。3歳からヤマハ音楽教室に通い始め、90年よりヤマハマスタークラスに在籍し本格的にピアノを学ぶ。92年、ドイツの第3回エトリンゲン国際青少年ピアノアカデミーコンクールA部門にて第1位。2000年、第5回浜松国際ピアノアカデミーコンクールでアカデミー史上初のグランプリを受賞。シドニー国際ピアノコンクールでも第2位に入賞する他、多数の賞を受賞する。02年6月、第12回チャイコフスキー国際コンクールにて、女性初のピアノ部門第1位を獲得。日本人初の快挙でもあり注目を集める。

これまでに世界各地でのリサイタルや音楽祭に出演。デュオ指揮でNHK交響楽団やゲルギエフ指揮のマリンスキー管弦楽団など、多くのオーケストラとの共演を果たしている。CDは日本人として初めてEMIクラシックスと契約し、チャイコフスキーの作品集を収めた『グランド・ソナタ』、フルーベック・デ・ブルゴス指揮のロンドン交響楽団と共演したチャイコフスキーの『ピアノ協奏曲第1番』が世界でリリースされている。08年10月にはクリスチャン・ヤルヴィ指揮ウィーンキュンストラ管弦楽団との共演がオーストリアおよび日本で予定されている。

1曲1曲を丁寧にじっくりと、曲の歴史や背景、作曲家の内面まで深く掘り下げる姿勢を学びました。チャイコフスキーコンクールで優勝できたのもこの先生に学んでいたおかげだと思います。

6年生の時にドイツの子ども向けの国際コンクールに初めて出場して、幸い優勝できたのですが、そのときのお城のような会場の音の響きの素晴らしさや、日本人とは違うお客様のダイレクトな反応は新鮮な驚きでした。以来、人前での演奏も好きになり、いろいろな国際コンクールに出場しました。コンクールで知り合えた友人は、現在、世界中で活躍しています。めったに会うこともできませんが、コンサートがあれば聴きに行ったりと、一生の宝物になりました。

**木之下** 私が子どものころは戦争前で写真も珍しい時代。新聞社の地方支局で記者をしていた父が暗室で現像している時、真っ白な印画紙に画像が

### 自分の作品を好きな音楽で 残したかった(木之下)

——新日鉄音楽賞受賞おめでとうございます。初めに、この道に進まれたきっかけなどをお聞かせください。

**上原** 母にヤマハの「3歳児ランド」という子ども向けの音楽教室に連れて行かれたのがピアノとの出会いです。母は私をプロにしたいと思ったわけではないのですが、毎日、歌ったり踊ったりするのが本当に楽しくて、遊びながら自然にピアノも大好きになっていました。

本格的にピアノを始めるようになったのは小学校4年生の時、ヤマハのマスタークラスのオーディションに合格して、東京に通うようになってからです。ピアノを専門的に習う子や作曲を学ぶ子などが集まっています、私の生活もピアノ中心になりました。ロシア人の先生の指導を受けるために、先生の滞在日程に合わせて学校を休んだりもしましたが、その先生から、



ヤマハのクリスマスコンサートで自作曲を演奏  
(芦屋市の「ルナホール」にて。当時6歳)

# なによりも相手に喜んでもらうこと。そのために 良いものを撮る。すべてはその積み重ね

ゲスト◎写真家〈特別賞受賞〉

## 木之下 晃氏

プロフィール◎きのした・あきら

1936年、長野県生まれ。日本福祉大学卒業後、中日新聞社、博報堂を経てフリーの音楽写真家となる。以後40年にわたってクラシック音楽をテーマに、世界の音楽家や劇場、ホールなどを撮影。音楽家の本質をとらえ、“音を見せる”作品として世界中から高い評価を得ている。

34冊の写真集を刊行。主なものに『小澤征爾の世界』、『世界の音楽家 全3巻』、『巨匠カラヤン』、『朝比奈隆-長生きこそ最高の芸術』、『カルロス・クライバー』、『武満徹を語る』、『The MAESTROS』、『ヴェルディへの旅』などがある。71年の『On STAGE～音のある風景』（銀座サロン）を皮切りに、和光ホール、神奈川県民ホールをはじめ各地の美術館などでの展覧会も数多く開催。世界各国の政府からの招聘も15回に及ぶ。現在、『音楽現代』、『音楽の友』、『モーストリー・クラシック』などで連載中。

71年日本写真家協会新人賞、85年第36回芸術選奨文部大臣賞、06年日本写真家協会作家賞、07年には紺綬褒章を受章。



浮かび上がってくるのを見て父がまるで魔法使いのように思えました。それが写真を好きになったきっかけです。高校時代、長野県の諏訪に、日本で最初の35ミリフィルムのカメラを作ったオリンパスの下請け工場ができました。その工場主の息子が同級生だったことから、強引にカメラを借りて(笑)、授業風景をはじめ、いろいろと撮りまくり、卒業アルバム委員会を自分で作って一人で自分の写真をまとめて卒業アルバムを作りました。ですから、このアルバムが私の処女作のようなものです。

やがて新聞社を経て広告の世界に入りました。高度成長期でポスターやパンフレットなどの広告作りの仕事は

華やかでとても面白かったです。でもどんなに良い写真を撮っても広告はその瞬間、それきりなんです。広告カメラマンはみんな自分の作品を残したくなるんですが、私はそれを好きな音楽でやりたかった。そこで、フォークやジャズ、ロック、70年

代のポップスなどを撮りました。ジョン・コルトレーンやレッド・ツェッペリン、ピンク・フロイドなども撮ったんですよ。

このころの私の写真は被写体をはっきりとらえるのではなく、ステージ全体の雰囲気を取めたくて、わざと画像をぶらす独自の撮り方をしたのですが、それが「音を感じる」と評判になり、いろいろな賞をいただいたり、商業カメラマンとしてはちょっと知られるようになりました。

ところが、あるとき社長に呼ばれて、「カメラマンのままじゃ偉くなれないから、広報室のスタッフにならないか」と言われたんです。迷いに迷って、結局会社を辞めて写真家として独立することにしました。37歳でした。フリーになってから、音楽の中でもクラシックなら長く残ると思い、クラシック専門の写真家になろうと決めました。ところが広告と違い、やっぱりクラシックのカメラマンの収入はとにかく安くて、食べていくのが本当に大変でした。



博報堂時代の木之下さん 撮影:渡辺秀俊



木之下氏が撮影した上原氏の演奏写真 ©木之下晃

### 相手が納得するまで繰り返す。そうして築かれた信頼は次へとつながる(木之下)

——木之下さんは気難しいと評判のカラヤン氏をはじめ、多くの巨匠を撮影されています。どのようにして信頼を得てきたのでしょうか？

**木之下** 写真の仕事において、私は雑誌に写真を載せることよりも、そこをスタートに写真集にまとめることを目的としていたので、雑誌社からの依頼だけではなく、自分が撮りたいと思う音楽家に直接取材を申し込んでそれを雑誌に掲載してきました。

この仕事で何よりも大切なのは、撮った写真を相手に納得してもらうことです。撮り手が気に入った写真を被写体本人が気に入るとは限らないんですね。人間ですから、みなさんいろいろなこだわりがあります。相手を知らなくてはそれもわかりません。私は演奏家

なら演奏する姿を、作曲家なら仕事場の仕事姿を撮ります。そして、撮った写真を、本人に見せて意見を聞き、それを意識してもっと良い写真を撮る。その繰り返しによって信用を得ていったのだと思います。

カラヤンを最初に撮ったときに、本人に見せた2枚の写真のうち1枚は「素晴らしい」といわれ、あとの1枚はその場で破られました。彼は、

自分を残すことに強い意識を持っている人で、演奏はもちろん、写真に限らず、文章やCDなどに対してもとにかくチェックが厳しい人でした。

幸いカラヤンにはとても気に入られ、可愛がってもらいました。彼の、ヨーロッパにある4つの家に招かれたことはとても自慢ですし、一時期は専属カメラマンとしてザルツブルクに来ないかと誘われました。特に厳しいことで有名だった彼のリハーサルに入って写真を撮ることを許されたのは次の仕事につながりましたし、私自身、大きな自信になりました。

とにかく、本人に喜んでもらうことが一番。こうやって知り合った相手の中には、その後も付き合いがずっと続いている人も大勢います。ロリン・マゼール、ズービン・メータなどや、小澤征爾さんもその一人です。お互いにまだ若かったころ、リハーサルの間も自由に撮らせてくれました。今の巨匠たちも、昔はみんな若かったんですよ(笑)。

### 何ごとにも動じない集中力を持って臨んだチャイコフスキーコンクール(上原)

——上原さんは2002年にチャイコフスキーコンクールで日本人初、女性初の優勝として話題を集めました。そのときのエピソードをお聞かせください。

**上原** その4年前に出場したときには本選まで進めませんでした。ロシアは時間どおりに物事が進まず、小さなハプニングも多い。ですからコンクールを乗り切るために“何があっても動じない”、“集中する”ことを心掛けました。

チャイコフスキーコンクールは、1次予選から会場に多くのお客様が入ります。コンクールの第1回から通い続けている方も多く、演奏が気に入らなければ席を立ってしまう、ある意味で審査員よりこわい存在なんです。予選ではその雰囲気飲まれて自分の力が出せず、本選の方が調子が良かったほどでした。

優勝の瞬間は、うれしさよりも取材に応えるのが精一杯でした。でも何回も何回もカーテンコールがあって、取材や着替えをする間も客席で私を待ってくださるお客さんの拍手に包まれるにつれて、頑張った本当に良かったと実感しました。

翌日からはコンサートやリサイタルのオファーをたくさんいただきましたが、それまでは学生でしたから、いきなり年間100ものステージをこなすような生活はできません。何よりも優勝したからといって、いきなり上手になるわけじゃない。周囲の盛り上がり流されて調子に乗らないよう、マネージャーと相談して、練習時間とのバランスも取りながら、できる範囲で仕事をするようにしました。



ポーランドでツアーを行ったときの様子(当時16歳)

## 続けること、練習を繰り返すことで、ふと変化や成長を感じる(上原)

——仕事の中で喜びを感じるのはどんなときですか？ また、そのためにどんなことに気を遣っていらっしゃいますか？

**上原** 本当に調子の良いときには、弾いていることを忘れて、聴衆と一つになり音楽の中で息をしているような感じになることがあります。家で弾いているときには決して感じられない、そんなときが音楽をやっている一番の喜びなんです。残念ながらいつもそうではなくて、弾きながら「ここが悪かった」と反省したり考えているときもあります。ですから、準備と練習が必要なんです。楽譜を見なくても演奏できるくらいその曲が身体に入っていなければ良い演奏はできないんです。

以前はソロの方が気が楽だと思っていましたが、最近オーケストラとの共演も好きになりました。多分、自分とは違うものを受け入れていく余裕ができたのだと思います。オーケストラはみんな個性もバラバラで、最初は互いに探り合うのが大変ですが、練習を通して譲り合い、認め合って作り上げることに楽しさを感じています。

**木之下** 本当に素晴らしい写真が撮れたときには、自分の存在が消えて、あたかも神様に撮らされているように感じます。その時はシャッター音も聞こえず、自分で意図しなくても自然に完璧な構図で撮れているのです。作品として残るのはそんな写真です。私の人生は、そのような写真をどのようにしたら撮れるかを考え続けているのです。

仕事を通して世界の巨匠たちに感じるのは、彼らの集中力のすごさです。カラヤンも小澤さんも棒を振り出したら、他に何も見えなくなる。この集中力の強さで、仕事ができるかどうかが決まると言っても良いと思います。これは上原彩子さんもそうですよね。その集中力をつける訓練の仕方は人それぞれなのでしょうが、巨匠について言えるのは、みな努力家です。そして何よりも、音楽が本当に好きなんだろうということです。彼らの勉強や練習量は半端ではないのです。

もうひとつ大切なことは、長く続けることです。私の場合、若いころは失敗することもあると思って、とにかくたくさんシャッターを切っていたのですが、不思議なことに、若いころに比べてだんだんロスが減っていきます。繰り返し、積み重ねること、それがたまたま力になるんだと思います。

**上原** 私も続けることが本当に大事だと感じるようになりました。大変ですが得られるものは大きい。毎日続け



木之下氏の写真展「世界の巨匠101人」(ミュンヘン・ザクセンホールにて、ブレンデルの眼鏡に鍵盤が映りこんだ作品の前で) ©三好英輔

ていると、ふと自分の変化や成長を感じるがあります。自分では気付かず、人から褒められて自覚できることも。そんなときは本当にやってきて良かったなとうれしくなります。

——今後の抱負、紀尾井ホールのご感想などをお聞かせください。

**上原** 私が演奏を通してできるのは、エネルギーを送ることです。聴きに来てくださる方が、日常のこまごまとしたことを忘れて幸せなときを感じてくれて、翌日からの生活のエネルギーにしてもらえるような演奏をしたいと思っています。

紀尾井ホールは音の響きがとても豊かだと思います。演奏していて聴衆と一体になれる感じが好きなので、とても心地良いです。

**木之下** 紀尾井ホールですが、実は設計段階から関わっているんです。私は、最近日本につくられた劇場の多くに、写真撮影のブースや写真を撮るための窓を作るようお願いしてきました。リハーサルではなく、本番の緊張感を撮影するには、音が聞こえて、良いアングルで撮るための場所が必要なんです。紀尾井ホールはとてうまくいった例なんです。

私は演奏家とは別に、自分で撮りたいと思った約300に及ぶ世界中の劇場を訪れて撮り続けてきました。日本では山間部に残る江戸時代の古い劇場も探っています。このほかモーツァルトなど昔の作曲家たちの足跡を写真でたどっています。今後はこうした未発表の取材ノートをまとめていきたいと思っています。



新国立劇場にて、フランコ・ゼッフィレッリ氏と ©三好英輔